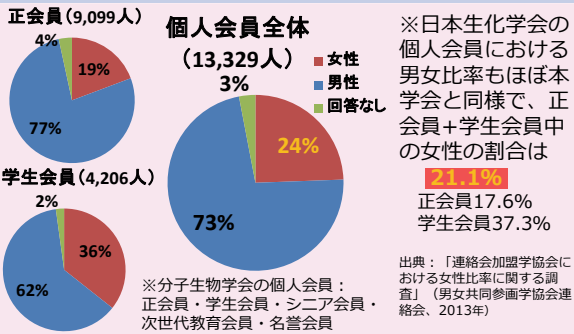


バランスの取れた研究環境を築くために ～2015属性調査から学べること～

疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なく、より積極的に発表し、評価される機会を創出することだと言える。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度（男女共同参画委員会/当時）から継続調査を行っている。今年度は日本生化学会との合同大会（BMB2015）における結果をまとめた。

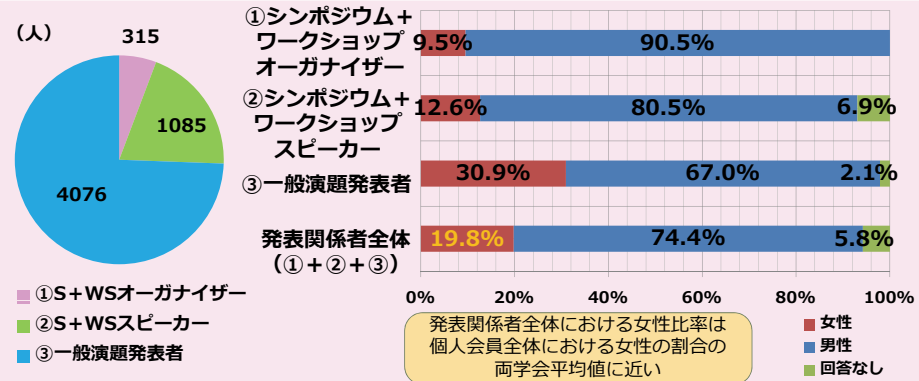
日本分子生物学会会員の男女比率 (2015年8月31日 現在)



BMB2015における属性調査

今回は5,476名が調査対象となった（のべ人数）。大会の演題登録システム（日本語版・英語版）にアンケート設問を設置（回答は任意）。性別、年齢、所属、職階（身分）について、発表者には投稿時に協力して頂いた（5,161名。Late-Breaking Abstracts投稿分は含まない）。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。

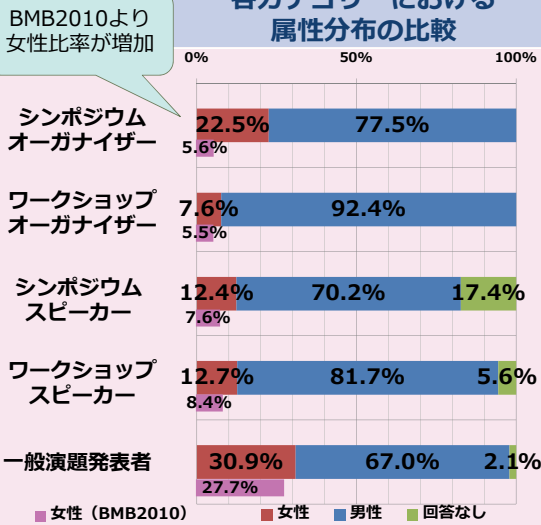
学会発表への参加の仕方



発表者が決まるプロセスの違い

- **シンポジウム**
オーガナイザー：年会プログラム委員会で検討・依頼
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼
- **ワークショップ**
オーガナイザー：応募者（=自薦）の中から選抜される
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（=他薦）
- **一般演題発表者**：自発的な申し込み

各カテゴリーにおける属性分布の比較



今年の傾向

発表関係者全体における女性比率が個人会員全体における女性の割合に近い値を示しているのに対し、スピーカーやオーガナイザーにおける女性比率は、それを下回っている。他方、前回合同大会を開催した2010年との比較においては、各カテゴリーの女性比率は全体的に増加がみられ、特にシンポジウムオーガナイザーではその傾向が著しい。

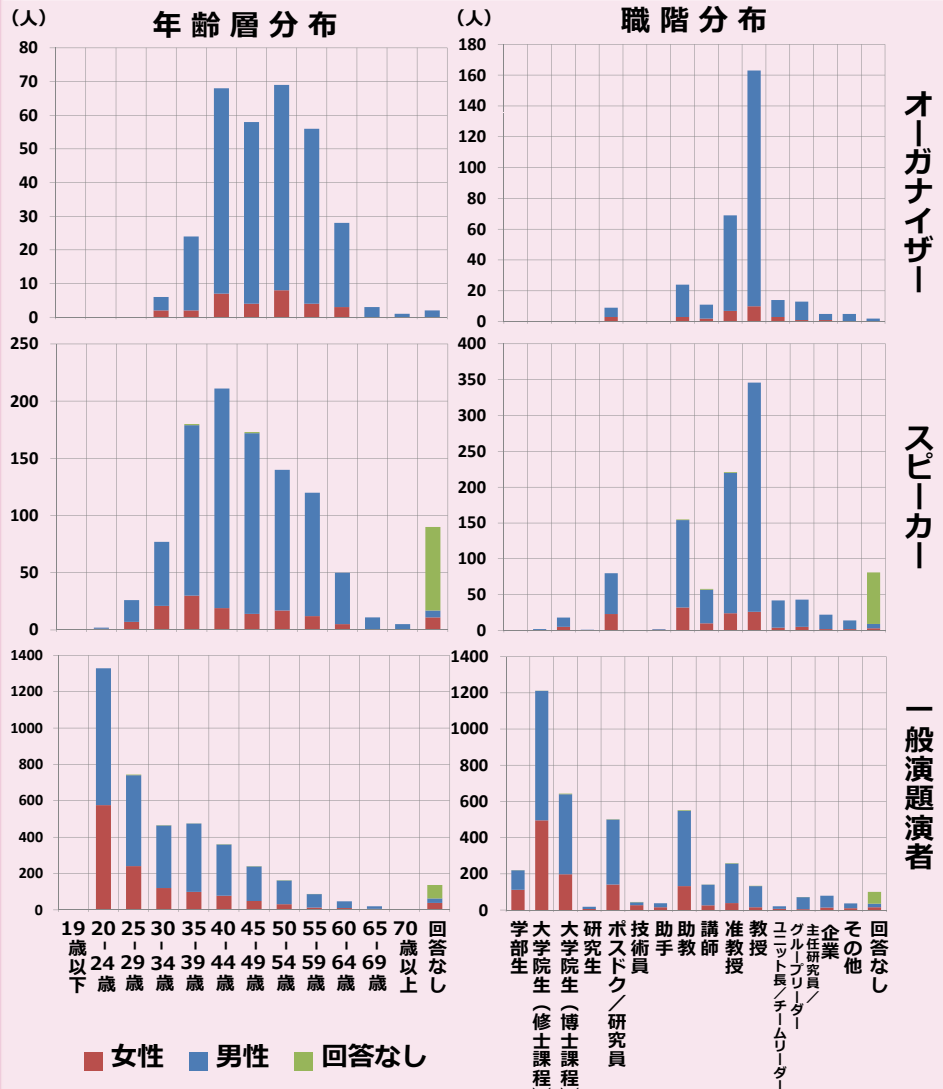
冒頭に掲げた疑問については、調査の結果事実であることが数値の上で確認されたが、今後の伸びが期待される。

女性・若手研究者を学術集会の場で今後どのように活かしていくかが、引き続き運営側の課題となる一方で、女性研究者本人の意識について把握し、自薦のカテゴリー（今大会における公募ワークショップのオーガナイザーなど）で女性比率の“増”を促進する方策を考える必要性を指摘する声もある。

本当にバランスのとれた状態を実現するためには、継続的な属性調査を行い、現状把握と取り組みの方向性を検討していくことが大切です。どうぞご協力をお願いいたします。



年齢・職階と発表カテゴリーとの関係は？



オーガナイザー
スピーカー
一般演題発表者